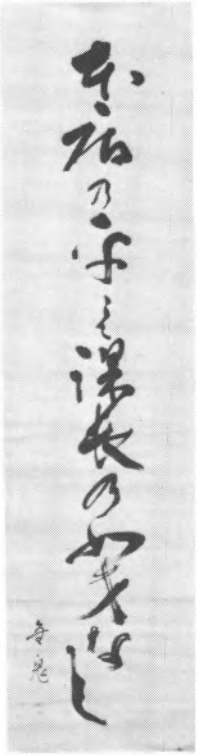
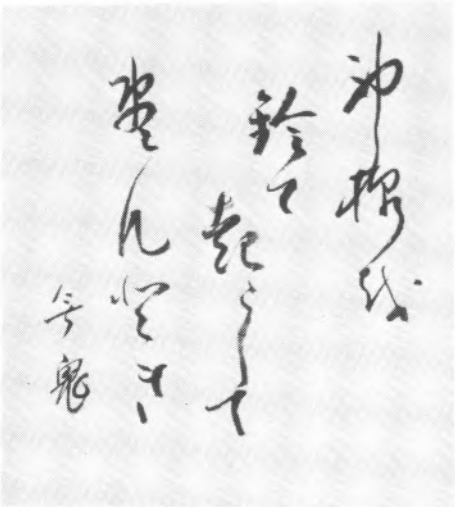
わらび坂

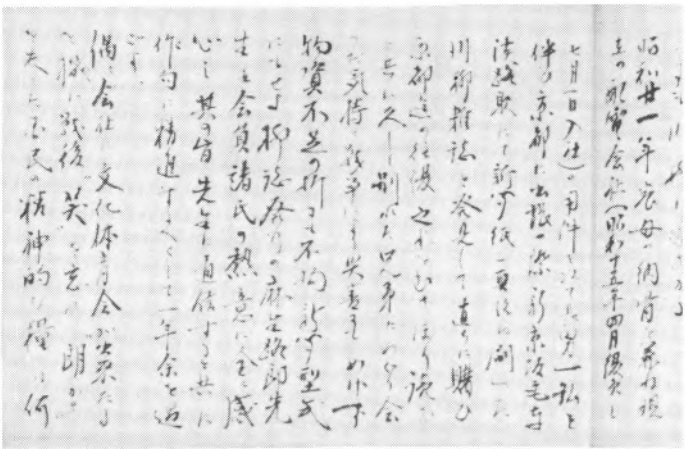
小西無鬼遺句集

川柳雑誌社より作家訪問を受けた折の二人

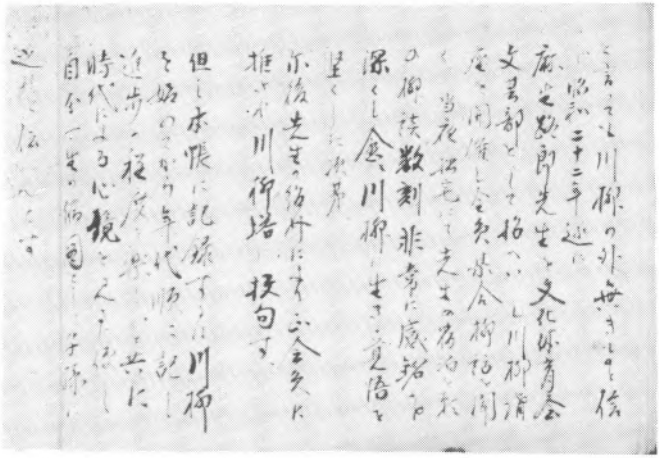




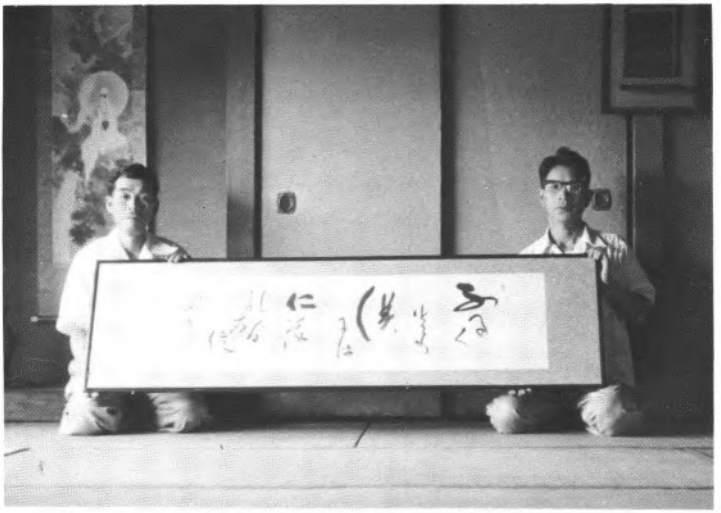
勲章拝受記念（昭和15年４月29日）



山川柳大会感謝（昭和34年 4 月10日）



川柳帖の一部（昭和24年）



路郎師の句を表装する。無鬼（左）とひか平氏（右）（昭和31年）

本社川柳まつりで全国優勝楯を獲得する（昭和31年７月）

兵庫県ともしび賞 受賞（昭和52年10月11日）

篠山にて

麻生路郎

わらじ酒さらばさらばとバスが出る
夜桜に二次会まではゆくつもり

私は各地の風俗、人情、風習等を求める旅が好きであるが、先日デカンショの唄で有名な篠山の、川柳大会に招かれて出かけ、数人は一泊して、非常に興味のある物に接した。朝の食事が済んで、愈々発とうとすると、大きな湯呑みに酒を出された。これは草鞋酒と云うのだそうである。

篠山は丹波の山又山の中にある町である。昔はどこへ旅立つにしても必ず山越えで行かねばならぬので、元気で行くようにと、草鞋を履きしめてから、グッと一杯やったものらしい。それが一つの風習となり、わらじ酒の名が生まれたのであろう。私のように常にあわただしい都会生活をしている者にとっては、

情趣の深いものであった。（一九五五・四・二一）

わらじ酒無形文化財にとは師曰まわず

不意に来てすぐ去ぬ友へわらじ酒　　無　鬼

◆篠山川柳大会感謝　昭和三十年四月十日

午前十一時ご来篠

歓迎の心を写す花吹雪

濠端桜並木

改めて恩師と共に見る桜

記念撮影

満開の桜の下でかしこまり

大会の興奮

歓喜もう云うべき事をさえ忘れ

懇親会

踊り度くなる頃時間来てしまい

二次会へ

師を離すまいと夜桜へ抱きかかえ

十日夜の雷雨で桜散り果て

見てもらうだけ見てもろたので桜散り

わらじ酒無形文化財にとは師曰わず

見送り

見送りへ師は発車迄立ち給い

列車もう見えず煙へ立ち尽し

師の蔭

師の蔭を踏んで師の道が継げず

こんな句かと叱られそうな雲の峰

一周忌

恩師まだそこに居りそな在ますよな

先生!!　あとは絶句の七回忌

雲の峰道はるかなり空仰ぐ

宇宙から人間陶冶の声がする

序文

畏友　小西無鬼さんの遺句集が、来年五月、三回忌の御法要を期して発刊されるという、御遺族の温かい御志で、句稿の選と序文を仰せつかった。選の方は早々に出来たのであるが、序文の方は先に川柳「ささやま」という三〇〇号を記念する会員句集の序文を書いているので仲々ペンをとれなかって、困った。

松茸狩句会やデカンショ祭句会と随分親しくして戴いて作句は勿論だが、寧ろ

呑み友達どちらも髭を生やしてる

の句のように、盃を手にしたことが二人の仲に多いようで、選句していくうちに次々と酒の句の出て来るのも当然であった。

無鬼さんは、生前兵庫県から、ともしび賞を戴かれ、ボーイスカウトの団長として、若い人の指導育成にあたられ又篠山町会議員として町政に活躍された時の佳句玉句がこの句集の中にぎっしりつまっている。

例えば、ボーイスカウトの句に

永遠に育てよ僕の三指礼

又、関西電力㈱に勤務しておられた時の句に

変電所猛獣並みに扱われ

配電局電気時計が止まってた

又短冊によく書かれた句に

神様を鈴で起こして頼んどき

一ト飛びを蛙熟考してのこと

消防車街のラヂオは小原節

等の無鬼さん独特のユーモアのある句があるかと思うと、

金貸しの奥に女の笑い声

お妾の襷をかけてみたりする

という辛辣な句も見える、然し無鬼さん、本来の御性質は

幼稚園の列と帰った日の和み

の句が本当のお心持であって、子供好きなところは、私とよく気の合うたところである。

次の企画は、青山氏五万石の篠山城址の桜吹雪のもとに、無鬼さんの句碑建立されん日の近からんことをお祈りしてやまない次第である、その時の句は

幼稚園の列と帰った日の和み

の句こそ、無鬼さんの面目躍如とした温かいお心持である。

無鬼さんの遺してゆかれた川柳「ささやま」句会の益々御発展を祈願して序文の筆を擱く。

昭和五十七年霜月

水鶏庵にて　栞　識

川柳と路郎師との出逢い

私が川柳を始めたのは、昭和二年頃である。その動機は当時の雑誌、殊に娯楽誌（日の出、キング、面白倶楽部、婦人雑誌）等で川柳漫画を見て、寸鉄人を刺す人間の感情に訴える十七文字が、自分の性格に合致する点を見出したからである。

麻生路郎先生にお目にかかったのは、私が北浜の会社に勤めていた頃、市電監督として北浜交叉点に勤務されていた橋本緑雨さんに出逢ってからである。一度句会へ来なさいと奨められて、今思えば北浜から一、二丁行った会場、多分、道修町の薬品街の階上で、出席者十人余り、恐る恐る末席に座った私は、投句したかは覚えてないが、やがて路郎先生の選句評が始まり、暫くして大喝一声「こんな句を作るからいかんのだ!!」どんな句だったか私はオドオドして

いて記憶にないが、先生の教えられる川柳の意義を悟らぬ句だったんだろう、ピリッとした私はそれから句会へ出席するようになり、（川柳の本質を知り度くて）会社でも知友を誘い今橋二丁目の神田ビルに移った会社で、川雑「関土地支部」を創り、同好の士と共に終業後句会を持ち、故福田山雨楼師、故松森琴人師交互のご指導を贈わった。

当時、阪大川柳講座の講師も路郎先生がされていたが、長谷川教授やもう一人の教授らが川雑誌近作のトップを飾っておられるのを拝見して、僕も一度は巻頭を飾らねばと心に決めたことだった。

病気になって故郷へ帰り、療養中作句に努めたが幼稚な私の句は三カ月全没。初めて一句拾ってもらった句は、

〝一ト飛びを蛙熱考してのこと〟であった。川柳雑誌昭和四年八月号、路郎師選。

療養中庭の木蔭の籐寝椅子で、蛙を見つめての実感句である。次号が「唇を許した様に椿咲き」の句で青春の躍動の現れた句かも知れぬ。

もくじ

篠山にて……麻生　路郎……1
師の蔭……4
序文……西尾　栞……6
川柳と路郎師との出逢い……8
かしわ手……13
数珠……20
桐ヶ城……23
父・母……31
町議会議員・ボーイスカウト……39
風のながれ……47
コンパクト……83

社員・小あきんど……97
百薬の長……111
季節の陽……125
独りごと……137
旅愁……171
ぼたん鍋……187
本能……203
五十一の輪……217
祝吟……225
年頭吟……228
著者略歴……233
手向け花……小西冨士子……235
跋……遠山　可住……256
あとがき……小西冨士子……258

かしわ手

お朔日信仰試すように降り

まぎれ込むチボを睨んだ仁王門

石段の高さ気にせぬ月詣り

大鳥居くぐってお参りの顔になり

祭礼に亡父が寄進の幕光る

神様を鈴で起して頼んどき

冬空へ柏手ありがたく響き

悔のない今日を神前では誓い

信心の前を子供が走り過ぎ

古稀

これからを神に托して自適する

信仰へ今日はあやまる事多く

祭神のいわれともかく拝んどき

神様の、こっちゃと寄附を頼みに来

お祭りの此処もかしわの羽の跡

災難を神の教えと云う悟り

間違いのない豊作へ祭りが来

柳友（ともしび）の手が消さなんだ小さい灯

死ぬまでは消すまい心のともしびは

極まって言葉にならぬ声となり

数珠

団参の徽章と徽章すれちがい

善男善女の顔で詣った花まつり

団参の帰りやっぱり唄と酒

秋深く落葉をかぶる六地蔵

蠅を打つ手が止った盂蘭盆会

よく出来た人であったと一周忌

首すじの扇子が似合うお寺さん

ご先祖へ通じる鉦を信じきり

桐ケ城

松風にもののふの声桐ヶ城

築城の粋を積上げ井戸に見る

天守台現世の野球見るもよし

濠の蓮時を違えぬ大自然

殿の下知聞えそうなり天守閣

史蹟指定になって今更覗く井戸

吹く風が哀史を語る丹波富士

ふる里に住む幸めだかも蛙も居

鄙はよし朝の散歩に飛ぶ蝗

義人清兵衛の碑の前にて

一杯の献盃もない蔵人の碑

でかんしょ祭り

でかんしょの踊りで会えた君と僕

でっかんしょほんに荷物にならなんだ

でかんしょでずばり指された我郷土

気軽うに踊ってこまそでっかんしょ

でかんしょの寝言女房に笑われる

どないでもよいがな踊りの輪に入ろ

盆踊りあの娘が踊るので踊り

でかんしょで責をふさいだ汗を拭き

しゅんとした酒席でかんしょで活が入り

盆踊り夜露が降りたのも知らず

でかんしょはどこで唄うても和してくれ

父・母

夜なべする母を寝言がほほ笑ませ

ちと飲めばもう涙ぐむ父となり

おうそうかそうかと父の逆らわず

一粒の火種へ祖母の火吹竹

繕ろいの老母は日向で背を丸め

父九十歳

夢の様な話に合槌打っておく

ウナ電へはやる心は故郷へ飛ぶ

臨終へ飛ばす一〇〇キロ引っかかり

亡父送る麻裃の襟正す

九十の死を他人様は目出度がり

どの角度から見詰めても父母の顔

亡き父の声なき声を聞く今宵

母慕う心が甘い柿が好き

亡父の齢にまだまだ足らぬ七十三

義理だけは果せと親は云い遺し

双親をもう幻で追うばかり

兄憲夫九兵衛を襲名

襲名の兄らしうない名とはなり

町議会議員

ボーイスカウト

町議会議員

当選の見通しソファーへ深く掛け

今日までの苦労飛ばしたダルマの目

萬歳へチームワークの良さが見え

戦塵を洗い落して月を見る

投票に様をつけてた女文字

着くとこへ着き情熱を絶やすまい

あげ足の取り合いをして妥協して

判らないとこは静かに頬かむり

世の裏をちっと教えてもろただけ

駈け引は性に合わない事ばかり

任期満了ゼスチュアの多い事多い事

情に弱い男をおだてんといてんか

立候補辞退

重石が一つ取られた背伸びする

肩書が取れてのれんのくぐりよし

ボーイスカウト

焚火するキャンプ山賊めいて来る

お互いの仲は挙手するだけでよし

永遠に育てよ僕の三指令

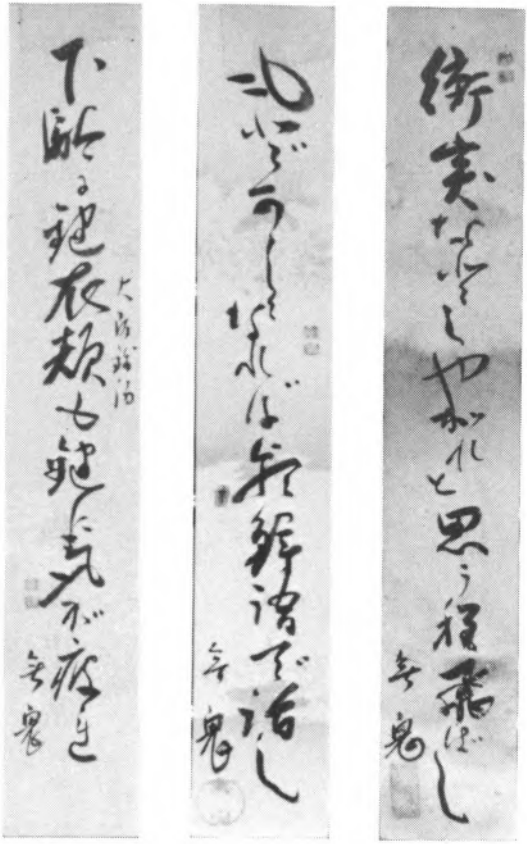
君達と別れる僕の三指令

バトンタッチあとは顧問にまつり上げ

引退の潮刻と云う感謝状

力強き引幕僕は楽屋入り

肩の荷を降せば風の軟かく



風のながれ

昭和二十六年九月二十六日（二句）

掻き廻すだけにソ聯は出席し

調印に罪は一時に消えたごと

昭和三十三年十一月預金封鎖解除

政府もう財布の底を見透かして

少年赤十字（三句）

勇退へ燦たり少年赤十字

ふれ合った心へ譲るＪＲＣ

晴耕雨読どころか一生ＪＲＣ

結局は踊らされてる署名なり

四・五人のゲリラに世界騒がされ

大阪の鼓動はっきり午前二時

舗装路はそこで終ったバスの揺れ

狂信の深さへ世間も恐れ入り

戦争のない国にいてガンマニア

ダウ新値放した株の相場欄

株売ってまだ相場欄見る未練

祝日の街並国旗の二・三本

救世軍僕も救われ度い一人

消防車街のラジオは小原節

アスファルトもう継ぎを当て継ぎを当て

泳ぎ廻った揚句の汚職に引っかかり

小野田さん私も乾盃しましたよ

大阪でうちより不味いうどん食べ

甲子園昔の血潮たぎるなり

総会と云うおよばれに行っただけ

商魂がみんな祭に仕立て上げ

免許にも金と力が物を言い

タイヤの跡がとっさを物語り

工事見れば失業救済かと思い

達筆の投書を役場で見せられる

勝って飲み負けても飲んで草野球

順待ちの欠伸数えて診療所

親切が又金の要る歯を見つけ

よう凝ってますなと按摩肘で揉み

洞窟の様にして住む材木屋

保険屋になって恩師の如才なし

呉服屋の売れぬと見たか早う巻き

安物とクリーニング屋見抜いてい

店の間も奥も算盤はじく音

パチンコの前で子供を返しとき

金貸しの奥に女の笑い声

ぶらついただけの夜店で草臥れる

受取りも書けぬ店主でよくはやり

サービスの悪さへドアを足で出る

待ってまっせ甘い言葉にひっかかり

土へ帰れぬ洋服の暮し

買物に来て一寸と店番頼まれる

篤農のほまれ節くれ立った指

野次馬の中へ野次馬割って入り

それ程に損を気にせぬいい育ち

もうそれを云うなと彼の目が知らせ

霊柩車徐行もせずに出てしまい

雨宿りついでにトイレも借りて去に

緘口令風の便りが吹き破り

人の世の情は庭木の鋏にも

外泊の嘘を寮長知っている

ダークホース今は職場の隅に居る

どたん場で死ぬと云うたは男なり

出藍の誉親父の値も上がり

倒された金は一桁多く云う

やぶ蛇になる仲裁と知らなんだ

峠行くバスも景色の内に入り

岐れ道逢う日の指切りして別れ

出しぬけに訪えば子供を叱ってい

せっかちが又僕の下駄履いて去に

強引に押す手もあって親しまれ

隅の方でくすっと泣いてみんな泣き

定年は知らず判だけつく身分

交渉へその心臓を買われてい

紋服が度々門を覗きに出

汽車賃が惜しいと思う満員車

うたた寝へ隣の肩を借る夜汽車

責任のないのがハッパかけに来る

規定通り取ればガメツイ様に云い

自動車のドアは怒った型で閉め

うっかりと覗けば更衣室だった

一流の文字をスラスラスラと書き

持ち寄った智恵も大した物でなし

折角の見舞が悔みになる不幸

内情を聞けば噂と喰い違い

お妾の襷をかけてみたりする

会葬の中で雑談大き過ぎ

虎の威を借りて示談ですます肚

小言云い乍ら女房の肩を持ち

バレタ嘘へ云いわけの嘘考える

裃を脱いで和解の道がつき

名物のうな丼と云う廻り道

妹と云うてあちこち連れ歩き

憂さ晴らしと知らず鼻唄羨やまれ

長々の無沙汰へ就職頼んで来

よぼよぼでまだ銀行に出入りする

八十の杖で高利の集金し

光頭会髭は大事に大事にし

子や孫と暮す希望が世と違い

老けたとは云わずお元気なお元気な

金持って養老院のボスでいる

相乗りの見ている眼程怖がらず

オートバイ燕の様に縫うて行き

ペン軸を立てて今宵のランデブー

慎太郎刈りが夜汽車の前に坐し

落書に子供の夢を見逃がさず

幼稚園男の意地も持っている

産声の堕ろされかけたとも知らず

貧乏がこんな達者な子に育て

一分間の柳論

小西無鬼

（川柳塔五四四号掲載）

且つて路郎先生に「作者が川柳であると発表したものは即ち川柳である。可、不可は別として」と、又「同一人の句を永らく選をしていると一面識もなくても句主の年齢、職業、生活までピタリと判る」とも私は教えられた。

近頃の川柳の判りにくいのや面白味の句が少なくなったと聞く、所謂感覚味の句が多くなりつつあるからだと私も思う。革新的な句、感覚的な句は下手すると独善に陥る惧れがある。川柳の定義に路郎先生は「川柳とは、人間及び自然の性情を素材として、その組合せに依る内容を、平言俗語で表現し、人の肺腑を衝く十七音字中心の人間陶冶の詩である」と。川柳は時代詩でもあり、現代柳人の句として、世の転変に伴い変わるのも当然だがあくまで個性を生かした「川柳味」豊かな句をと願うものであると同時に、「いのちある句」を残したいと念願している。

（昭和四十七年九月発表）

八月に憶う

小西無鬼

毎年八月原爆忌が来て心に去来するのは、長崎でのピカドン。あの閃光と茸雲、そして視界から消えて行く敵機と風船玉のようにフワフワと飛び行く落下傘二個の姿、眼底にはっきりと刻み込まれたあの時の光景である。

昭和二十年七月、二度目の応召で長崎に先行し、後続本部隊を迎えた日であった。市街の坂を越した東山裾、小学校庭で部隊長の訓示の最中、天の一角にキラリと閃光走り、頬に一瞬さっと熱風を受けた。長崎は摺り鉢街だが、峠の下の丁度死角であった為、幸運にも被爆から免れたが、任地の有明湾守備どころか直ちに救援に馳せ参じ、原爆の惨状を目のあたりに見た。駅のホームの屋根は無く、鉄柱は鉛の棒をねじ曲げたよう。街が只一発の原子爆弾で一瞬にして消え、多くの人が焼き殺されたのである。終戦後も一カ月余り守備についた後、任地臼杵郡諫早町の街を去ったが、今でも昨日のような気がする。

（昭和四十七年八月）

コンパクト

コンパクト仕舞えば返事らしくなり

女の子が抱いて人形らしくなり

年頃の欠伸袂へ押へつけ

夜の蝶などと生きてく道もあり

頬紅はピエロに似たり処女と云う

美しいと云う自信最高の化粧品

ほんとうの姿淋しい素顔の妓

掃除する特権ソファーにも憩い

仔犬など抱いて淋しく嫁きおくれ

もめごとの客へマダムの如才なし

目頭を押えるだけで女勝ち

美人ではないが涼しい眼が魅力

闇米へ女の力見直ほされ

氷嚢の様な乳房の揺れるバス

スタイルに惚れたらえらいヒスだった

親一人娘一人爪を赤く染め

岐れ道女気強よう見せて去に

責任を誰にか問はんヒステリー

参院選

一位二位みんな女にしてやられ

立て通す操へ寡婦の気が重い

堂々の発言婦人の自由主義

泣く事は女にまかしておくドラマ

紅一点意識して来たわけでなし

信心か深夜の女恐しく

又一人増えたマダムの立話

テリヤなど飼えばザマスが云いとなり

婦人会下駄のちびまで勘定し

何祈願辰年女と書いてあり

目の前を昔見合いをした女

真中へ押し出されてる紅一点

近頃に聞けば離婚をしたと云う

命がけの結婚だったのに離婚

気分転換パートタイムのそれも良し

急用を女の列に阻まれる

ご婦人の詩吟いささか詠歌じみ

伝法な口でおばはんよく儲け

手土産を置き挨拶の暇が要り

裾さばきちと大げさな草の露

状袋で渡せば恋文めいて来る

婦人会寿司で結構手を叩き

社　員

小あきんど

社員

本店の平へ課長の如才なし

宿直の寝相も夏と云うポーズ

宿直は課長の椅子に座ってみ

能率の上がるは課長不在の日

大掃除課長ともかく鉢巻し

俺だぞと云うスリッパで社長来る

なまくらが退社時刻は厳守する

下ッ端とみてか挨拶しなくなり

出張のこんな所で友に逢い

出張の帰る汽車賃だけ残し

課長にもならず神馬に似た勤め

彼も又下っ端と云う袖カヴアー

すぐ判る賞与を秘密らしく呉れ

会場は有馬あとは慰労だなと思い

名曲か知らねど夜業腹が立ち

配電局電気時計が止まってた

面接へ人事課長の軟かし

変電所猛獣並みに扱われ

ストに入る話ストーブ赤く燃え

決算へ課長自腹と云ううどん

課長ちう地位が石橋叩かせる

関電初午祭

飲む事のだしに神様都合良し

集金に来ぬとて怒るのも役所

社長から来るお流れへ坐りかえ

小あきんど

勘定の合った算盤珠の音

両替に煙草を買うて下さった

売れ残る公算特価へ廻しとき

メモ代りに使こたお札幣で釣を取る

老骨の店番お釣を忘れかけ

汚職には非ず煙草の送り物

新発売どうあろうとも喫うてみる

暑中見舞に交って納税告知状

ボーナスは誰もくれない小あきんど

受託公衆デートの呼出し頼まれる

十円を値切る淋しい心見る

ポケットの塵も一緒の煙草銭

皺苦茶の紙幣をポイと出すアロハ

雅号ぶっちゃけばなし（13）

・小西無鬼・

むき　こにし

君嗤い給う事勿れ。無鬼なる文字は、鬼は無いとも、鬼で無いとも読む人の勝手である。語れば古い事乍ら雑誌社へ投句するについて何かよい号をと考えた末、姓（当時の）広瀬を広い世間ともじり「広い世間に鬼は無し」と云う事で、広瀬無鬼と号したが、養子になって意義が無くなったのと死んだ時無鬼居士では、生前鬼のような奴だったな等と後世に誤解されては困るので、改号を柳友に相談したら、永年無鬼で親しんで来たので「無鬼」が矢張りよいと云う。でそうムキになる事もないと思い現在に及ぶ。雅号の由来如依件。

煙草小売と売店経営　六十一才

百薬の長

百薬の長なり常に愛飲す

一串は持ったまま出る縄のれん

大トラで迷わず戻った午前二時

日本号の槍が取れそな飲みっぷり

決断をする助太刀に酒が要り

二次会をあてこんで行く祝賀会

熱燗にむせて話に間が入り

駅に入るポイント酒がちとこぼれ

三次会ここで別れる握手する

顔振れが揃いやっぱり脱線し

盃をつい差しとうなるお顔

天高くタクシーも酒も値が上がり

不許葷酒山門外を飲み歩き

熱燗の好きなも亡父の癖に似て

カウンター燕の列に似て並び

奥さんにざっくばらんの飲み仲間

しゃっくりをしながら盃まだ受ける

癌やろか潰瘍やろかと矢張り飲み

四日目は神に背いて飲みはじめ

主治医には内証どうしの飲み仲間

もう一人の僕は禁酒禁煙主義と云う

たまらないピンチへあおるコップ酒

量感も添えるジョッキの重さなる

つき出しがちと物足らん大ジョッキ

あと口の洋酒で足を取られたり

夏バテを癒す嬉しい酒があり

首相より豊か朝晝晩と飲み

決断の禁酒もろたウイスキーが破り

禁酒して何かふぬけな刻がたち

血圧は薬で下げて飲み続け

生き延びる兆しか酒が飲めるなり

酒煙草と心中するなら飲めと云う

真剣に取組んだのち酒が要り

おまけした様につき出し持って来る

禁酒禁煙意志はたしかに潜在す

但方丈乃
茶却程で
却程で

安忠

季節の陽

本当の若水と云うはね釣瓶

紅梅の一輪咲いて手洗鉢

新暦と旧暦桜ちと迷い

世相どう変ろうが咲くだけ咲く桜

捨てられていても咲いてる菜種なり

春なれや居眠った娘に凭れられ

こちこちのお茶席を出て春を縫う

天と地と人とぴったり春の線

萠え出づる若葉が老の目に痛し

五月雨に墨摺る幸の久し振り

心して見ればねぶかの真すぐな

箱入りに似てる姿で咲くダリア

通り雨初夏の睡気を持って去に

手を呉れぬ胡瓜は無念の蔓を巻き

扇風機の下は動かぬ待合所

冷房を出れば地獄の風が吹き

貸文庫誰が閉じたか蚊の栞

溺れてる様にも見えるバタフライ

髭剃って夏バテ少し隠せたろ

夏バテを近い宿舎で避暑としゃれ

暑くとも嬉しい便りが元気づけ

虫だけを鳴かして主不在なり

明月へ虫もオーケストラで浮かれ

岐れ道切なかろうと曼珠沙華

栗拾う子供を追うた所有権

禅僧に似て瓢箪のぶら下がり

うまい物ばかり秋空今日も晴れ

秋晴れへ鍵を隣へ托す留守

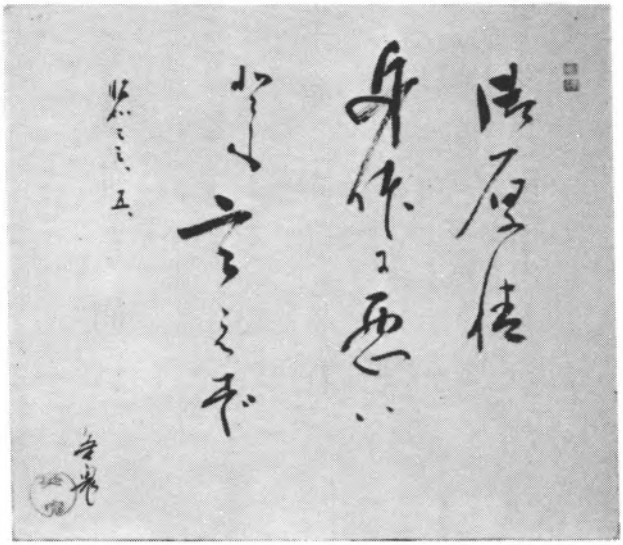
錦繡の秋に乞食の土下座する

スキーヤーサンタクロース程背負い

大雪が炬燵へ酒を誘い込み

初雪や我門前を掃き惜しむ

独りごと



応召の覚悟へ髭が伸び揃い

一枚の赤紙生命預けられ

片言の支那語事変の勇士とか

かけ引もなく目覚ましに起される

丸白の運勢雑煮を二杯平げる

気の弱いのが人混みではぐれかけ

二階借り二鉢程へ水をやり

肝腎なとこで袴の裾を踏み

此処までが私んとこの門を掃く

知恵のない時間待ちして乗りおくれ

点眼へ目は口程に開かぬなり

借金の返せた朝を軽う起き

気軽うに引受けてやりや念を押し

一頁だけ読んだ聖書が出た掃除

やけくそに振ったバットのホームラン

戦中の癖か煙草を消して持ち

チャルメラに昔を偲び一つ買い

兄と間違われて又髭を置き

糸口を作る煙草の火を借りる

ご歓待気兼しいしい皆よばれ

素人の庭木手入れを蜂が刺し

外人とありがたそうな握手する

独り言云うて老人気が紛れ

新生じゃ象牙パイプが泣きませう

とぼけとく努力仲々骨が折れ

一陽来復暦の記事を信じとこ

疳立てた言葉へフッと自嘲する

フッと今日思い出のタイ締めてみる

一言を押える唾をぐっと飲み

大空へ消えゆく煙の人生か

代書させといて器用貧乏とは何や

上品とは個性をかくす事なるか

両断の腹で問題の席へ出る

真相は語れず奥歯噛みしめる

気安うに引受け半端な事ばかり

誕生日今日一日は怒るまい

はっきりとけじめをつける墨を摺る

不便さは足袋に右足左足

男だぞ貫く意志は持ち合わす

至誠天に通ずる時を待つばかり

複雑な気持へ犬と散歩する

刻の経つ早さへ足踏みしてみたし

占いも佳し決行の肚を決め

来た道と何か不安な逆コース

今月は残す気持の月始め

膝小僧抱けば空の色碧し

我家さえ建たぬに保証たのまれる

書き終えた返事淋しい封をする

顔ぶれを見て発言を中止する

盗人に笑われている金庫税

字引まで買うてクイズは当らない

ソーッと開けたので盗人かと思い

本心をくだを巻いてる型にする

忘れ物ゆんべの後先考える

善悪を写し鏡の静かなる

爆発もしたかろ有珠山ならずとも

若さはいいなウインク一つにも

神様になる石蹴飛ばされる石

降りそうで降らない空も政治型

涙隠す眼鏡だったとは知らなんだ

人間のもう一皮が何故脱げぬ

譫言まで云うなら話にのってやれ

内容はどうあろうともポチ袋

大げさに云うてしもうて淋しけれ

失敗のモデルケースに引き出され

せめてもの気休め癌でないと云い

喜び様見れば厚意が恥しく

都合して来ますと外へ出たものの

風林火山嗚呼我若ければ若ければ

癖が又出たかと相談にも乗らず

庭いじりやっぱり老化現象か

日の丸は好きだ血潮に似て赤し

生れたは裸だったと諦める

自慢にもならぬ古剣だが楽し

爆音を仰ぎ淋しい気も起り

聞き捨ててておくには真に穿っとり

天気予報信じて寝たら寝冷えをし

同情をしたら保証を頼まれた

誘い出すその口実に乗ってやり

年嵩で座持ちのスピーチ指名され

ガスライター迂闊に髭を焦がしたり

学歴のない気楽さの背伸びする

アクセサリーにしては草臥れてるパセリ

口笛が不自由になった総入歯

朝酒をかくすマスクの白過ぎる

忠告が油注いだ事になり

息抜きの煙草へマッチ湿ってる

親に似た小言も明治生れなる

六十を越してこの世へまだ迷い

生きて行くきびしさ今日も銭が要り

人生を考える暇なし日は暮れる

しづのおだまき今を明治に返さんか

幼稚園の列と帰った日の和み

臥ておれば仕事の山が目に迫り

合掌の姿へ涙線張るも齢

切れ止んだ庖丁と云う僕自身

老いぬれば牛歩に劣る歩巾なる

血圧をすぐ計られる齢になり

患うてから長生きへ慾を出し

旅

愁

旅愁とや酔い痴れてみても旅の宿

新妻と行けば写真屋つきまとい

面はゆい気持で妻と宿を出る

堂々とやれと励ます瀧の音

荒浪へ燈台どんと来いと佇ち

アベックで座れば砂丘映画めき

散歩する砂浜もない熱海にて

現し世は宮が貫一蹴るならん

夫婦連れ旅の土産の渉らず

小さい義理果す土産を一つ買う

つっ立った湯気に不動を思わせる

五湖巡り逆さの富士も日本一

白一色富士は気高き姿にて

方言も教へガイドのよく喋り

温泉に浸った返事長うなり

初飛行旅行　四句（昭和三十四年）

空の旅雲上気分満喫し

二時間で五十三次頼りなし

大空で三合空けた乗心地

飛行機の窓越し上に下に富士

ガンジーに似た人も居て旅の汽車

旅に出て郷里の宣伝怠らず

乗り込んで車窓の景は飲みながら

責任が酒に酔わさぬ旅となる

旅に出たとたん手形が気に掛り

水盃迄はせなんだ船の旅

悲鳴に似た汽笛が腹に沁み渡り

恐ろしい海に夜空の美しい

口止め料と云う罰もあり旅の事

酒ばかり買うて土産を買い渋り

舳先に立てば東郷さんの気持する

山陰の文化見直す汽車に乗る

ヌードショー覗きに行くも旅の事

息抜きの旅で掏られて来た財布

泊り込む肚は座敷を替えて飲み

特急待ちする急行で帰って来

一杯と風呂・風呂と一杯繰返し

汽車の扉はがちゃんと閉めるものらしく

心待ちしてる土産を買いそびれ

途中下車ここでも愛を囁く気

東京オリンピック観戦

東京の真中で聞く明烏

ありがたや陛下のみ声生で聞く

玉音をオリンピックの庭で聞く

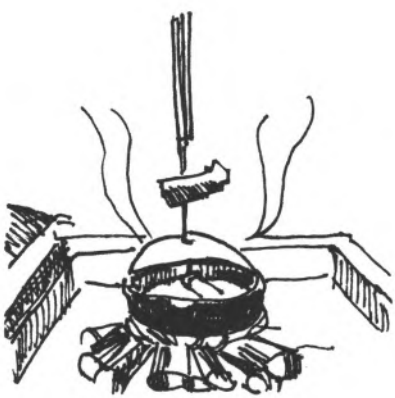
ぐっと来た心へ上る日章旗

スポーツマンシップ後から一人三周す

雄鹿にも似てハードルを飛ぶ速さ

体操が軽業めいて金メダル

ぼたん鍋



ぼたん鍋丹波の冬を彩づける

今朝産れ一人前の欠伸する

産湯からもう背伸びして背伸びして

喝采に笑いこぼれる歩き初め

里の母もう次の子を待っている

煎餅ぐらいで機嫌の取れるうちはよし

むっつりと居れば我子の気を遣い

福当てる大きい慾を子に引かせ

幼稚園今日から返事改まり

長男大学入試パス（二句）

石松の口調で激励しといたろ

進学へこれからの脛覚悟する

二男大学パス（二句）

角帽へ親は溜息ついとれず

骨の出た脛とは子等のまだ知らず

長男大学卒業（三句）

背広着る初の写真を撮ってやり

大臣の卵もあらん巣立つ今日

就職の意気へ背広の肩の幅

二男大学卒業

卒業の証書へ親も酔う今宵

肩の荷が少し降りたよ学士君

長男結婚

荒浪を越えん船出のドラが鳴り

人生へ船出の足の軽からん

二男結婚

絶間なき祝辞へご馳走忘れられ

結婚へ親は苦労の金を借り

肝腎の孫が動いている写真

母なれや児の片言がよく判り

初孫を抱いて軍歌の子守唄

三歳の孫の踊りへさえ涙

三歳の孫が我家のマスコット

近々に行くとは無心の事らしい

帰る子へ親の情の荷が嵩み

有難や孫が昼寝をして呉れた

幼稚園の妹へ姉としての所作

叱ったろと思ったら笑顔で振り向いた

鉄人アトムが乱れた子供部屋

お年玉外孫らしい顔で受け

巣立ちした燕の便り孫へ書く

孝行の一端と云う座椅子着く

出張へ孫をあやして乗りおくれ

祖母押した坂道今日は孫が押し

一円貨おはじきにもして呉れず

寝転んでみても団地の狭い部屋

早よおいでやおいでやと孫がせき

面と向えば甘い父なり酌いでやり

人形に似てる素足も孫の物

本

能

春風に任した様に鳶が舞い

前身は語りとむない蝶々なり

胸板を突抜く型で燕来る

放流の稚鮎も哀れ先が知れ

目に青葉牛も働く時季と知り

田植歌聞かれず蛙抗議する

忙しい田植へ犬は寝るばかり

仕返しに来たか蠅叩きに止まり

フラダンスの型で金魚は尻を振り

鳩ポッポ痰の詰った声で鳴き

なめくじの足の早さに驚いた

なめくじのこう這いました跡をつけ

とんび今餌を見つけた輪を画く

今日も暑うなるぞと朝から油蟬

老人の昼寝に困る蟬時雨

青虫が街の娘を走らせる

鼻鳴らし鳴らし豚は運ばれる

映画南極大陸を見る

ペンギンと遊ぶ姿の子供じみ

愛を信じ肩で小鳥の悪びれず

コオロギが鳴き鈴虫が鳴き詩が生れ

飛び乗ってみたい姿で鵞鳥浮き

コンクリートの塗立て犬は遠慮せず

大道へ犬の寝相の大胆な

犬は地に鼠天井の自由主義

犬は君人より恩を知ってるぜ

計ってる様に蛙の飛んで行き

墓石の凹みに眠る雨蛙

食用蛙ここに居ります声で鳴き

ひと飛びを蛙熟考してのこと

愛鳥か知らねど籠で鳴かされる

飼主はなし野犬の自由なる

鞍取れば馬の背中の禿げている

雀フト何の思案かしたらしい

真実な虫の叫びを聞き給え

釣糸に遠くピチリと跳ねる音

見よライオン百萬に対わんとする姿勢

来年もおいでと送ってやる燕

昭和五十五年一月十日を迎えて

遥歴の坂を
ひたすらに
来たりぬ

令和

花の坂を
越えて
米寿へ
一歩づつ

令和

五十一の輪

鼻からをショールで巻いて待って呉れ

元日の女房真面目に手をつかえ

女房へ今日は負けとく宿酔

寝煙草を又叱られた蒲団です

銀婚

ふり返る二十五年の段梯子

老眼鏡女房ボチボチ借りに来る

古稀からを神に托した墨を摺る

から威張り昭和の古稀はまだ若し

意地捨てて妻のペースに合わす齢

一寸出た食慾看護を喜ばせ

ピチャッとも云わさず妻の風呂長し

見くびっていた年金を頼りにし

北海道のかおりご近所へも配り

長生きをしよう夫婦の合言葉

憶い出の野道に妻を振り返り

三号の次が五号と云う病棟

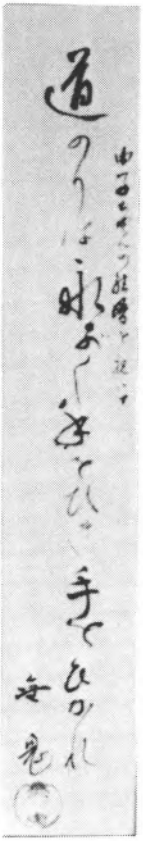
入院をしてても印鑑要るのなり

廊下迄やっと出られた恢復期

引き伸ばす写真ぽつぽつ探しとこ

お互いに眼鏡探して老夫婦

気の弱い事を家内に指摘され



道のりは永がし手を引き手をひかれ

祝

吟

祝吟結婚

とこしえに愛を契った手の堅し

祝金婚

手を取りて米寿へ向う足軽し

百歳の計は金婚式で建て

金婚は嬉し米寿も又楽し

金婚へダイヤ婚へと寿ほがれ

金婚と喜寿この次の米寿追う

人生の春だよ喜寿はまだ若い

喜びを子等に頒たん金婚式

年頭吟

初日の出大和心へ映えるなり

目出度さは初日と神と共に在り

牛歩でも良し皆様と共に行こ

誠実な牛の足跡見習わん

辰年だエネルギッシュに行きましょう

目標をじっと見詰めん巳の如く

巳の年だ巳の年冬眠しておれず

脚並を仔馬に合わし駿馬ゆく

初鶏の鳴声おどけた声を出し

金の卵生む酉年であれよかし

ブルドック迫力満ちた歩きぶり

昭和三十四年停年退職の元旦

新道へ目を据え替えるお元日

著者略歴

明治三七年三月二一日　出生
大正　九年五月　帝国信託株式会社（後関西土地（株）と改称）に入社
（昭和八年九月辞職）
昭和　二年　川柳に興味を覚え路郎師と出会う
昭和　九年　四月一日篠山町商業青年学校指導員を嘱託さる（一六年四月一〇日辞任）
昭和一三年六月二一日　支那事変に依る応召の為篠山連隊に入隊
七月四日　満州国に向けて出征
昭和一三年十月一二日　バイアス湾上陸
昭和一五年四月一五日　帰還応召解除
四月二九日　勲七等青色桐葉章受賞
昭和一五年七月一日　関西電気株式会社（現関西電力（株）に入社
昭和二十年七月七日　再度の応召を受け姫路連隊に入隊。八月四日長崎に向け出発
昭和二〇年八月九日　長崎にて被爆
九月　復員
昭和二三年　関西配電川柳会を作る
昭和二三年一一月一日　厚生省より民生委員を委嘱（四六年辞任）
昭和二八年一月　小川町内会長（四〇年一月辞任
十月　日本ボーイスカウト多紀第一隊登録、団委員長就任（五一年辞任）
昭和二九年一月二四日　川柳篠山第一号誕生
昭和三〇年四月一〇日　篠山川柳大会開催
昭和三一年四月八日　大阪川雑婦人友の会開催
七月　本社川柳祭りで全国優賞楯を獲得す
昭和三三年六月　日本専売公社関西支社長より表彰を受く
昭和三三年一一月四日　県知事より煙草小売業五二年の企業長寿の表彰を受く
昭和三四年三月二一日　定年に依り退職
四月一〇日　川柳篠山支部十周年記念大会開催
昭和三四年七月　篠山町議会議員に当選
昭和三五年四月二九日　日本ボーイスカウト有功章　受賞

昭和三六年七月　本社川柳祭りでひか平氏優賞に依り篠山支部は優賞桶を永久保存となる

昭和三七年一一月三日　川柳篠山百号記念大会

一二月一日　民生委員児童委員並びに篠山町心配事相談所、相談員を委嘱さる（四六年辞任）

昭和四〇年九月二一日　県知事より優良民生児童委員として表彰を受く

昭和四一年九月　篠山公衆電話協会々長に就任

昭和四一年一一月三日　篠山町長よりボーイスカウト育成に依り感謝状を受く

昭和四二年　菩提寺の檀家総代を承る

昭和四三年一二月　厚生大臣より社会福祉の増進に貢献した功に依り感謝状を受く

昭和四四年五月一八日　日本ボーイスカウト郭公賞受賞

昭和四五年四月　老人大学川柳課講師を委嘱さる（五十五年三月辞任）

昭和四六年三月　川柳篠山二〇〇号記念句会開催　合同句集発行

昭和四六年一〇月　八尾句会と合同松茸狩句会開催

昭和四八年八月一五日　日本公衆電話会篠山分会々長に就任（五二年四月辞任）

昭和五一年八月　菜の花句会と合同でかんしょ祭り句会開催

昭和五二年三月八日　日本公衆電話会、近畿地方本部長より受賞

昭和五二年五月二九日　日本ボーイスカウト兵庫連盟長より感謝状を受く

昭和五二年十月十一日　兵庫県ともしび賞受賞

昭和五四年七月　川柳篠山三〇〇号記念合同句集　発行

昭和五五年六月　日本専売公社関西支社長より表彰を受く

昭和五六年五月二六日　死去　享年七七歳

法名　賢良院温誉正心直道居士

昭和五六年十月八日　日本公衆電話会より感謝状を受く

昭和五七年十月六日　明石公園内の民生児童顕彰碑に合祀さる

手向け花

小西冨士子

若水を汲む面影は母の物

丙午年元旦

たて髪を振って迷信打破叫び

酉年元旦

刻の声我世の春を謳歌して

還暦へ残る命をかきたてん

癸亥元旦

丹波路の老猪にもある明日の夢

寒行の太鼓を包み粉雪舞う

節分会心の鬼も追い出さん

この緑永久にと仰ぐ松の下

松枯らす虫の過信を許すまい

並び立つ松梅我家の姿とも

紅梅の色木枯しを耐えに耐え

紅梅の満開今年の胸開く

春やよい哀歓知って咲く紅梅

煩悩に挑む古今の雛の顔

汚濁の世泰然として雛の顔

百花繚乱蝶も毛虫も蜂も居る

体から半分はみ出たランドセル

明日を待つ心へ葉桜萠え始め

連休を故郷で出会う初背広

盆栽のご無沙汰怒っている姿

太陽の恵みいっぱい野辺の花

へんぽんと軽く三竿は梅雨晴間

一城のあるじ蜘蛛の巣のど真中

清流に足を浸したすすぎ物

しぶりつつ出たのに踊り足らぬらし

待望の雨で踊りの輪がくづれ

叢に咲いて野菊の安らな日

大空に似た色野菊にある自信

凡人の身にも葉摺れは秋の音

読書の秋外来語辞書手離せず

人踏んだ月もすすきに呼びかける

御輿舁く掛声職場の響なく

ふる里は過疎の姿の秋祭り

青空へ頭痛を押した洗い物

ひっそりと宿命を咲く秋桜

散り際の音で紅葉も黄葉も揺れ

南天の実の息づいて庭に雪

雪の日の樽は拾わぬ労働歌

長男小患

いつ飲んでくれるか知れぬ乳を捨て

負うた子をだしに見ている紙芝居

やせ蛙もう一茶など払い除け

受ける眸と撒く眸の中に飛ぶ小餅

熱帯魚きれいに生きて淋しがり

谷底に落せる母と包む母

二十色倖せと思う色を撰る

近代と古典の谷に惑うもや

心して歩もう足跡消されない

文化財逃れて文化住宅に

自己紹介する旧友の飾らぬ眸

見失うまい照りかげる希望の灯

花の香を花の香を追い行く老路

頭借り歯を借り借り度い物ばかり

人の世へほほ笑みかける大自然

極限の神秘に棲んでいる夫婦

一枚の紙幣の旅に思うこと

犬猿の仲に一筋誠の灯

下積みの確かへ高層ビルでんと
一言の余韻空気にある乱れ
大気今日澄んで流れる音のきれい
表裏の道が一つになるエンド
娘ら降りた車内緋牡丹散ったよう
毒舌をゆっくり胸にしまい込む
女です見つめ合います二歳です

底辺で支えた足はくじけない
人間のこだまを或日忘れとり
幾年の雌伏に耐えてリバイバル
親と娘の想いへ縁の糸揺れる
手探ぐりに溺め合いして縁の糸
呑み込んだ言葉へ風は吹き抜けて
復興へ故郷のかおり薄らいで

悪友があっさり保証してくれる

運命の岐路へ秒針きびし過ぎ

温室の花四季の風知らぬまま

日の丸の姿も敗戦二十年

礫一つ波紋の渦に佇たされる

遠汽笛夜汽車に偲ぶ母の膝

伊勢御廟脱靴土下座と云う姿勢

観光の顔で儲けている豪商
灯台の昼観光と云う姿
浮き沈み日月にさえあるものを
あの人にこの人に会う一人の死
厳然と旧家てう名の屋根の紋
無視してもされても斜陽にある重み
いたづらな風が唾を返して来

茶と煎餅だけで女は唄うてる

日々多忙ピーポーの音も日々多忙

奔放に生きて芸術香を放つ

駅前に住んで発車へすべり込み

人間を無視して地球廻るなり

覆水の流れを受けた盆二つ

暖かい胸に育った一つの芽

門出する孫よ伏兵に捕るな

散る花を追うて月待つ眸を澄まそ

アルバムの嵩脳味噌は空きに空き

美と醜の距離に泣いてる金と性

フト恋し敗戦の裏の落し物

直線か乗換コースか賽転ぶ

流れ流れた果の海には大魚待ち

じぐざぐに行くナウと云う胸の色

衣食住足りてサラ金業者増え

夕映の園に雌蕊の声高し

燦然と歴史を秘めて照る頭

久濶の挨拶体の故障から

その上の醜さ老の怒り顔

医療待ち笑いふりまく老一人

虐げた妻に看とられ老を病み

金婚（四句）

五十年袖摺り合うて背丸く

無縁から二世につづくエスカレータ

見放なされ拾われ運ともつれつつ

縁の糸手繰りつづけて五十年

仲人して（一句）

古雛も嬉し新雛引き立てて

紫煙の香

消費税落しときなと売る煙草

万札を出して発車へ釣をせき
両替へのそれぞれにあるテクニック
にせ紙幣でないよと客に先越され
万札の釣に追われるボーナス期
貸した金なのに集金朝を避け
それぞれの商いの香の染みた紙幣
娘から媼になった半世紀

品切れのランプ点って淋しい日

紫煙の香の中の起き伏しあと幾日

踊りの輪見つつたばこのキャンペーン

お坊さんケーキもサンタの靴も買い

つづまりの彼方へ向う手が冷える

手向け花

苦しまずさらばも云わず鉄扉閉づ

乾坤の別れへ雨は降り注ぐ

火葬炉の炎の中の句帖かな

織り直す縦糸へ借る横の糸

一筋の灯りみつめて独りの日

喪を運ぶ風は暮しのリズム変え

燕　燕　今年は爺さん居ないのよ

喪の年を片羽に聞かん除夜の鐘

祝われず祝わぬ新春の寒さかな

戒名にも今は馴染んで一周忌

手向花せめて我手に育てたく

句いくつ聞えて来そう香げむり

現し世の逢瀬は夢の中の苑

跋

丹波柳人の「ともしび」であった無鬼先生とお別れして早や三周忌の若葉が萠える。

私たちはその〝ともしび〟を受けついだものの、恩師に句碑も句集もないことが、ほんとうに心の虚しさであり淋しさでありました。

この度、冨士子未亡人より遺句集発刊のご相談を受けた時、一も二もなく賛同したものの、何の準備も出来ていない不肖の弟子でした。

先生の作句は寡作である。川柳雑誌――川柳塔――川柳ささやま――各柳誌から拾い集めたおよそ二、〇〇〇句の中から、西尾栞先生に抜いていただき、川柳塔社のお世話でようやく発刊することが出来ました。

無鬼先生をしのぶ先輩柳人や、多くの弟子たちの原稿もと思いましたが、す

べて割愛さしていただき、川柳人〝無鬼〟で全頁を埋めたことをご了承いただきたいと思います。

題簽、序文は川柳塔社理事長・西尾栞先生にお願いしました。表紙裏の絵は会員前川左文字氏が書いてくれました。

編集の不備は先生の御霊前におわびします。

ここに

路郎先生に叩き込まれた柳人〝無鬼〟の川柳哲学の心を、句集「わらじ酒」として世に送ると共に、弟子たちの心のともしびとして、いつまでも座右にともし続けて行きたいと願っています。

青葉匂う峰どの峰も恩師の碑

川柳ささやま社主幹
丹波川柳協会会長　遠山可住

あとがき

このたび、川柳塔社理事長・西尾栞先生、丹波川柳協会々長・遠山可住先生のご多忙を押してのご指導ご尽力に依り無鬼遺句集を刊行することが出来ました。栞先生には、川柳塔社理事長にご就任直後のご繁忙にも拘わりませず、味わいのある題名・わらじ酒という風情のある立派な題簽、選句、編集そして過ぎた序文で遺句集に華を添えていただきました。可住先生にも選句をお願いしました上に、細部に亘ってのご配慮に依る編集にて、こんな立派な句集が出来上がりました。無鬼の魂の喜び、感激がひしひしと迫ってまいります。

無鬼は川柳を生涯心の伴侶として生きてまいりました。しかし川柳も時代の推移と共に、句は、感覚も変わってまいりましたが、自分が魅かれて入門した「穿ち」「軽み」「ユーモア」を愛し、誰にも解り易い句を好んで作句しておりました。

そして一人でも多くの人に句を作る喜び、句を読む楽しさを分とうと努め、その方達と共に、川柳篠山の一号一号を大切に積み重ね、一〇〇号が生まれ、二〇〇号、三〇〇号と育てていただきました。そして句の巧拙を越えて、川柳を好む人達とのつながりを喜び人間性を愛し、それを支えに一生を生きました事は幸せであったと喜んでおります。

私も夫と共に楽しみたく一時作句に励んで婦人友の会のメンバーの一員として、葭乃先生、若柳潮花先生のご指導にて、生々庵師の浜寺の豪壮なお宅へ伺

わせて頂き、小石奥様始め、操子様、花代子様、〆女様、阿茶様、良子様らとお親しくして頂き、友の会の方達を篠山へもお迎えしてその交流を幸せに思いました。鳥取市大震災復興記念大会の際は、無鬼も選者の一人に指名され、丁度私共銀婚の年でありました為、旅行を兼ねて、篠山川柳会の方数名と共に出席しましたが、席題「復興」(北川春巣氏選)に左文字氏の句が天に、私の句が佳吟の留に、又同じく席題「トンネル」(松江梅里氏選)に私の句が天に抜け、その他の方達も上位入賞されて、鳥取民芸品の賞品の数々を戴いて帰った事は誠に楽しい思い出でしたが、その後才能のないまま努力を怠り、スランプの壁を脱し得ませんでした事は誠にお恥しく、諸先生、同好の方々に申し訳なく思う次第です。

長年に亘り無鬼にご指導、ご温情を賜わりました生々庵、栞両先生を始め、塔社参事、理事の諸先生方、月々の「川柳篠山」編集の労をお引き受け下さっております現会長可住先生を始め、表紙絵を送り続けられ、この度もお心籠る絵を賜わりました左文字様、当初から変わらぬご指導、ご援助を頂きました枝葉様、みのる様、無聖様、ひか平様、越山様、他皆々様に厚く御礼を申し上げます。最後に川柳塔社、川柳篠山、丹波川柳協会、全国の川柳会の限りないご発展をお祈りして、遺句集刊行の御礼を申し上げます。尚、藤原童心社のご夫妻にも献心的のお世話を頂きました事を厚く御礼申し上げます。

見える物触れる物皆亡夫の香

昭和五八年　如月

小西冨士子

小西無鬼遺句集　わらじ酒

昭和五十八年五月　三　日印刷
昭和五十八年五月二六日発行

発行者　小西冨士子
兵庫県多紀郡篠山町小川町一
電話〇七九五五②〜〇九七〇〇一七〇

発行所　川柳塔社
大阪市阿倍野区三明町二ー一〇ー一六
ウエムラ第二ビル二〇二号
電話〇六ー六二九ー六九一四
振替　大阪ー三三三六八

印刷所　藤原童心社

頒価 2,000円